

令和5年11月11日(土) 14:00~15:50

場所 裾野高校 会議室

静岡県立裾野高校 第3回学校運営協議会 議事録

1 校長 挨拶

田代直彦校長 挨拶

2 議事(司会 高橋委員長)

(1) 裾野高校の現状について

田代校長 来年度入試1クラス減の募集となってしまった。県全体で28クラス減少。定員が満たされている学校でもクラス減になっている学校もある。トークフォークダンスが盛況のうち開催することができた。各種検定や陸上部を中心に部活動も生徒はよく頑張ってくれている。

櫻井副校長 HPの変更を事務室を中心に進めていたが、来年度、HPを県下一律で刷新するということが決まりました。そこで、来年度の秋にHPの刷新に向けた準備を進めていくということになった。

福室教頭 令和6年度から、男子バレー部、剣道部、写真部は新入部員募集を停止することになった。クラス減に伴い教員数も減るため。

相馬事務長 創立120周年記念事業では、体育館と武道場のあいだのスペースに生徒がくつろげる憩いの広場を整備することができた。すでに完成しており、あとは、生徒作成の記念プレートのカッティングシートが貼られる予定である。

福室教頭 120周年記念行事の補足ですが、令和6年10月2日(水)午後から、本校体育館で挙げる予定です。記念講演者には、宮本延春氏を予定しております。

(2) 意見交換

志田委員 本日のオープンスクールの中学生の参加人数はどれくらいか。

田代校長 お昼の段階で、昨年度よりは参加者数は多いです。

稲垣委員 オープンスクールのための中学生向け掲示物がありますか。

櫻井副校長 オープンスクール用というものはないです。通常の校内掲示物になります。

稲垣委員 保護者はかなり、掲示物も注意深く見るので、日ごろの生徒の様子がわかる掲示物を用意するとさらによいのではないかと。

高橋委員長 就職先などの情報が掲示してあるのはとても良いと思う。こんな大企業にも就職できるのか、とよいアピールになるのでは。

山本委員 裾野市、裾野高校では中等教育一貫教育の話などが全然聞かれない。小中一貫なり、中高一貫なり、構造的改革を視野に入れて考えていった方が良いのではないかと。総合的な探究の時間について言うと、キャリア教育の観点から裾野高

校では取り組まれているのはよいと思う。離職率が 4 割～5 割の現状において、辞めずに残る人は結局仕事ができる人である。現状を分析する力や、先を読む力などを育てることが肝要である。何々を理解しましょう、だと単なる調べ学習で終わってしまう危惧がある。保育系列の生徒であれば、実習に出て現実の学びをしていくことがますます求められるのではないだろうか。裾野高校の教員同士でそのあたりのことも議論されるとよいと思う。

小田委員 学級減に関しては、もう、目の前の 3 クラス募集から 2 クラスになる可能性は高いと思う。気になるのは、3 クラス募集になったときに、裁量枠のⅡ（地域枠）が何%になるのかが気になる。地域で価値を創造して大学進学につなげようという考えのもと地域枠の 1 期生が、今の 3 年生になる。そのうちの 1 名が大正大学の地域創造学部を受験予定である。こうした取り組みを中学生にどう伝えていけるか、学校側に真剣に考えてもらいたい。大学進学の実績をとにかく上げたい。そのために戦略的に地域枠で入学した生徒たちをどのように育てていくのか、その点も今以上に検討してもらえるとありがたい。

山本委員 高校生は、何を理由に専門学校を選んでいるのか。学費の面で言えば、4 年制大学と負担額は変わらない面もある。様々な制度を活用すれば、金銭的負担面も軽減できるし、そのあたりの啓発も高校は生徒にした方がよい。

田代校長 保育系列の生徒とたまたま話す機会があり、奨学金制度のことも知ってはいたが、どこか他人事のようにとらえており、自分事としては考えていないようだった。大学選抜も総合型選抜など入りやすくなっている部分もあるので、先生方は知っていても、生徒たちはどこまで知っているか、私も気になってはいる。

山本委員 専門学校で、保育士 2 種免許を取得しても、担任ができない現状があるので、生徒は知らないと思うので、そのあたりのことも含めて生徒に知らせておいた方がよいと思う。

小田委員 地域枠は、3 クラス体制になると募集人数はどうなるのか。

櫻井副校長 120 人定員で 6 人前後になるかと思う。現在、先生方に中学校訪問しており、地域枠についても希望者が少なからずいると聞いているので、地域枠の裁量枠については、校長と検討してもう少し増やしても良いと考えている。

高橋委員長 知り合いの裾野高校の生徒に卒業後の進路について聞くと、「専門学校」という答えが返ってくる。それが、裾野高校の生徒の肌感覚なのかもしれない。

小田委員 裾野高校と同程度の学力を持っていて、近隣の私立高校に進学した生徒が、当たり前のように 4 年制大学に進学していったので、その学校の空気間のようなものはあるかもしれない。校風のようなもので。

山本委員 生徒の意識を変革するためには、新卒での就職した場合の給料の比較とかを教えて啓発することがよいのではないか。大学全入時代に大学卒なのか、高校

卒なのか、その後の人生も含めて考えさせるような進路指導が求められるのではないか。特に保護者も巻き込んでする必要が大いにあると思う。保護者の意識変革を促すことが肝要である。

高橋委員長 このコロナ禍で、就職率は大いに上がっている印象がある。とりあえず、専門学校に就いて最低限の就職ができるようにと考えている高校生は多いように感じる。親が失業しているのに、大学進学という選択肢はなかなか思い浮かべられない現状があるのかもしれない。私事になるが、私は都内大学への推薦入学の話もあったけど、自分自身は大学進学を選ばずに、就職を選んだ。そのことへの一抹の後悔は多少ある。個人的にはやはり大学へ行けるのなら、行った方がよいよ、と高校生には大いに勧めたい。そういった校風を少しずつ醸成していくことも大事だと思う。

小田委員 気になっているのは、高校1年生の時点で、将来は就職か専門と言う。それはやはり、親の影響でしょうか。大正大学志望の生徒は中学3年生の時に大学の説明を受けていた。コロナ禍前だったこともあり、学費全額無料だった。コロナ禍になり、全額無料ではなくなったが、給費制度や奨学金制度を生徒たちは知らないのだと思われる。

山本委員 大学のアカデミックな活動にしっかりとついていけるような姿勢、例えば、自ら課題を設定し、自ら進んで学んでいこうとする姿勢を育てていかないとだめだと思う。受け身的な姿勢では通用しない。単に知識を覚えることは、勉強ではない、ということ。

高橋委員長 いきなり進学校に変える、ということは絶対不可能。孫が裾野高校に通っているという人と話すとやはり、卒業後は専門と言う話を聞く。皆さんの話を聞いていると、大学進学を勧めたくなります。

田代校長 生徒たちが言うのは、専門に進む理由として資格を取るために専門に進学するという声が多い。この職業に就くためにはこの資格が必要だから、そのために専門に行くという理由になっている。

山本委員 資格だけ取っても、商売にならない。そこがイメージできるかどうか。起業するときにはマネジメントや税金のことなども知っておかなければならない。目先のスキルを追っていても、スキルはすごいスピードで変化していく。

櫻井副校長 生徒は経営者、というところまでとても考えられてはいない。どこかの会社で雇用してもらえれば十分だと思っている生徒が多いように思う。

高橋委員長 今の若者は、言われたことはしっかりとこなすけれど、その先については思いをめぐらすことができない傾向にある。

山本委員 指示待ちの学生はやはりだめです。

高橋委員長 特に対人の仕事では予想外のことが起きる。そういった場合に適切に対処できるかどうか、マニュアルにないことを迅速にできるかどうか、そういった

能力が求められる。

山本委員 裾野市では起業支援事業はありますか。

小田委員 裾野市だと、岩波キッチンがそれに当てはまるかもしれません。

山本委員 高校生も、そういうものを活用して自分が事業を起こすという実学の学びを  
実践するととてもよいと思う。

小田委員 高校生に伴走する大人が絶対的に必要だと思う。やる気のある高校生に大人  
が伴走して地域活性化のような動きをサポートしてやることができれば、と  
てもよいと思う。校内の教員だけではもう無理な話しである。校外の人材を  
引き入れて行う。だからこそ地域とつながってやる必要があるのではないか  
と思う。教科の学びだけではなく、課外の学びを地域の大人が伴走して高めて  
いく。

山本委員 総合的な探究の時間の研究テーマは見つかっていますか？

櫻井副校長 今年の1年生については、外部の「シヅクリ」という団体と提携して探究の  
基礎づくりを行っている。それらの活動を通じて、まずはどのようにして課  
題を設定していくか、などの能力を育てているところです。

田代校長 今の3年生でも、テーマを決めてクラスで発表して、優秀なグループが学年で  
発表して、最終的には全校の前で発表するという流れはできている。ただ、そ  
の活動が「探究」の趣旨にどこまで合致しているかどうかというと、若干の疑  
問は残るかもしれない。

山本委員 アメリカの場合、統一したテーマを決めている。例えば「水玉」なら「水玉」  
にして、手話グループは手話のグループで「水玉」に絡めて探究を深めるとい  
う感じで行っている。今の高校生の最大の課題は問いを立てる力が圧倒的に  
弱い。その課題設定の力をどう育てるか？そのための研修を教員はしている  
のか。

櫻井副校長 特定の学年部の教員は研修を深めてやっているが、裾野高校全体で教員研  
修で深めている状態には、まだなっていない。

ビジネス系列の生徒は販売実習などをしているが、マーケティングなどを  
さらに深めるには大学進学が必要だと思われるが、大学には進学せずにい  
ろいろな理由で就職しているのが現状である。

小田委員 実生活や実社会との学びが不十分なまま、中学生も高校生になってしまっ  
ている。地域との関わりがないまま、中学3年間を過ごしてしまっている。

山本委員 おそらく相対化する視点がないのだと思う。すごく小さい閉じたコミュニ  
ティのなかで完結した生活を送っている。他の地域の子供たちとオンラインで  
繋いで、自分の住んでいる地域の良さに気が付くことができる。自分の居住地  
域しか見ていない。世界が狭い。他の地域や異なるコミュニティと触れていな  
い。

小田委員 コミュニティについて言うと、自分の生活空間に異なる世代の異年齢がほとんど存在しない。気の合う仲間たちと狭い世界の中で十分幸せに暮らしている。だから、そこを広げる作業が必要である。様々な世代の人々と触れ合う経験を持った生徒は、グループ学習などさせても、抜群に活発な議論や活動ができる。学校の中だけではどうしても限界がある。

高橋委員長 今は核家族化が進み、3世代同居は珍しくなっている。高齢者や身体障害者とも関わらない。加えて狭い世界で生きている。しかし、いろいろなところでそうした経験を積んできた中学生は自然に大人や様々な立場の人と話す力を持っている。そうした異なる年齢や様々な立場の人と交わる場の仕掛けづくりや、裾野高校の4年制大学進学率を上げていくためにどうしたらよいか。そのために、私たちに何ができるか、を考えていきたい。やはり、進学実績を積み上げて、保護者の意識も変えていきたい。

小田委員 1年生の早い時期から、大学進学した先輩たちの経験談を聞かせるような機会を設けることができれば、良い刺激を与えられるのではないかな。

高橋委員長 あと、大学に進学しておけばよかった、という人の話も有効ではないか。大卒と高卒の企業内におけるシビアな待遇の差の話などは、生徒にも響くのではないかな。

山本委員 常葉大学にきている学生でも、いい意味での欲がないと成功しない。最低限の勉強をして単位が取得できればいいや、という姿勢の学生は実りが少ない。学ぶことに対する、真正な欲を持ってもらいたい。

小田委員 こうした議論を職員室の先生方がどれくらいしてくれているのか、が気になるところです。

高橋委員長 中学生向けの副読本には、車椅子で困っている人がいたら助けてね、という内容だったものが、そのように困っている人がいたら、あなたはどうしますか、というふうに生徒自身で考えさせる内容に変化した。正解が一つではない考えさせる内容に変化したので、自分自身もいろいろ考えさせられた。言われたことをただ単にやる人間では不十分で、自分で判断して問いを立てて自ら学んでいく姿勢を持つ人材が求められている。

稲垣委員 感想になってしまうが、自分の子供も2人裾野高校を卒業していきました。地域や保護者の方には、昔ながらの裾野高校のイメージがあると思う。裾野高校へ入学すると保育やビジネスの基礎をある程度磨いてくれるから、就職に向けていいという話しを保護者同士でも当時は話をしていました。4年制大学に進学すれば視野も広がっていいと思いますが、一方で家庭の事情もあって進学させられない家庭や生徒にとっては、裾野高校はいい企業にも就職させてくれるととてもありがたい学校だ、という評価もある。進学実績をあげながらそのあたりのバランスを取って就職希望の生徒のニーズに応えていくことが

できたら、地域にとってさらにありがたい学校になるのだと思う。卒業したら専門学校に進学したり就職するというイメージですね。親世代のそういう感覚やイメージをどのように変革していくかが問われるのではないかと、思いました。

山本委員 少子化が進んでいくのは明白で、このままだと裾野高校は先細りするの間違いない。だから、マーケティングの視点で大多数の中学生の保護者がどういう想いで裾野高校を選ぶのか、ということです。選ぶポイントは何なのか、という視点を考えることが大事だろう。常葉大学の付属高校で、志願者数が定員の2倍になっている高校もある。裾野高校も生き残りをかけて、学校の魅力化を進めなければいけないと思う。そのためにはやはり実績をあげるしかない。

小田委員 現状の裾野高校が中学生に魅力的な要素を提示できていないのはひとつの事実だと思う。綺麗な校舎があるわけでもなく、進学実績があるわけでもない。裾野高校は高校入試では入りやすい高校である。そして、入学後、意欲を持って3年間の勉強を頑張れば大学進学もできますよ、という姿を見せればひとつ武器にはなるのではないかと。そういった生徒を入試で確保し育てていくという一つの戦略としての地域貢献枠の裁量枠だと思う。

山本委員 ひとつ気を付けなければいけない点は、親がなんでもかんでも子供に手を差し伸べすぎることです。過干渉なんです。言葉を発しない子供が一定数散見されるようになって、よくよく観察すると子供が何か欲求を満たそうとすると、親が先回りして何でもやってしまう。これは、子供たちの様々な能力や意欲を逆に奪っているのが本当に気を付けたい点ではないか。問いを設定する能力が高校生は圧倒的に足りないのは、実生活の中で本物に触れさせることが最も大切。大学でも論文を書くためにテーマを決める、みたいなことになっている。保育園・幼稚園の段階で人と競争させることはよくない、という考えから自分が何が好きで、何に興味関心があるのかがわからない、という悪循環が生まれつつある。

高橋委員長 議論は尽きないが、そろそろ時間も迫ってきたので、また、何か我々にお手伝いできることがあれば、学校には遠慮なく言ってもらいたい。そのための運営協議会なので。司会をいったんお返しします。

櫻井副校長 貴重なご意見、ありがとうございます。次回第4回は年明けになります。よろしく申し上げます。

第3回運営協議会はこれにて閉会させていただきます。